

基督者田川飛旅子

—内なる迫害、そして鎮魂—

山本千代子

はじめに

俳人田川飛旅子を評するに、切口は二つある。「敬虔なクリスチヤン」と「科学者の眼を持つ作家」である。この二本柱が飛旅子の内に屹立したことで、物事が始まつたとも言える。「生の証の俳句を」が持論であつたが、当然作品に落とす柱の影は濃い。

喜寿の折の文章がある。

（私は如何に生きるべきかという指針を得るために、若いときから様々な書物を乱読して、手探りで道を求めてきた。顧みて何の本から一番教えを受けたかと考えてみると、（1）聖書、（2）道元による禅の

本、（3）宮本武蔵の『五輪書』になろうかと思う。）

若い頃、飛旅子は自殺を試みたことがある。直接の原因は定かでないが、青年期の懊惱であることは間違いない。梅の木の枝が折れて失敗したというのだ。

先頃、「パッション」というキリストの受難を描いた映画が話題になっていたが、世界人口の四分の三が「聖書」を神の言葉信じている。日本では一%前後がクリスチヤンだという。映画だけでなく、文学や絵画や音楽などへ常に題材を提供してきたのが「聖書」だ。

日本に於けるキリスト教は、徳川幕府が徹底的に弾圧したが、明治・大正期に信教の自由のもとに布教が盛んに行われた。知識人や文学者の中にキリスト教の門を叩く者が少なくなかつた。飛旅子の師である漱

直す新シリーズも始めている。かつてのオウム等とは違つて、自分の癒し、平常心を求めて、健全な心の働きで宗教を考える人が出てきているらしい。世界情勢をみても、宗教回帰は全地球的と言えるだろう。こんな時期だからというわけではないが、キリスト者俳人の作品を掘り起こしてみるのも無駄なことではないと考えるものである。

日本に於けるキリスト教は、徳川幕府が徹底的に弾圧したが、明治・大正期に信教の自由のもとに布教が盛んに行われた。知識人や文学者の中にキリスト教の門を叩く者が少なくなかつた。飛旅子の師である漱

邨も、父母に連れられて教会に通い、大正七年、十三歳で受洗している。

飛旅子（博）は、大正三年生まれであるが、母方の祖父がクリスチヤンであつた関係で、子供の頃から母と共にキリスト教には親しみを持っていた。

昭和八年旧制一高に入学するが、寄宿寮が本郷にあつたので日曜日には家に帰らず、友人と中央会堂というメソジスト教会（プロテstant）に通つていた。この年のクリスマスに、「受洗は信仰の入門なり」と牧師にすすめられ、断り切れず洗礼を受けた。「有無を言わざずだった」とは自身の弁である。

プロテstantとは、カトリックに対し抗議（プロテスト）したことによつて付けられた名称。伝統をしりぞけ、聖書のみに回帰する宗派である。

椎名麟三や太宰治など聖書にテーマを求めめた作家は多い。カトリックの遠藤周作、プロテstantの三浦綾子はつとに有名である。

飛旅子の科学者としての出発は、やはり一高理科甲類入学からとなる。そして、昭和十二年に東大工学部応用化学科に進学する。

理数系が大の苦手だった飛旅子は、好き

な文科に進みたかったが、応用科学の技術者だった父の嚴命でやむなく断念する。受験に失敗して苦労したこともあり、弱気からくる挫折感を「龍胆は若き日のわが挫折の色」「老いてなほ忌む予備校の冬の匂ひ」等と詠む。

文学への思い断ちがたく、父に隠れて短歌に手を染める。土屋文明の「アララギ」に入会し、昭和九年から二十五年までは歌人でもつた。昭和十四年の「アララギ」での一首。

かたはらにかがよふ少女取り出し

読み始めたり「人は何により生くる
か」
博

昭和十五年、東大を卒業して、古河電工（株）に入社。研究者・技術者として電池製作所に配属される。「電池及蓄電池」などの著書があり、四十七歳の時、東大から工学博士の学位を授与される。

俳句を始めたのは入社直後からである。

「アララギ」で作品が活字になる喜びを経験してしまったが、或るきっかけで加藤秋邨を知り、「寒雷」創刊から投句。その創刊号の巻頭を取つてのめり込むことにな

る。「風」にも所属し、昭和四十八年には「陸」を創刊。著作は、句集七冊、『加藤秋邨一人と作品』など。

さて、飛旅子は生涯にどれ位のキリスト教的俳句を作つたのか。活字になつたもので、私が採集できたのは、二百六十句。古い時代のもの、未発表のものを加えるなら、何百句にもなると思われる。有りていに言えば、キリスト教が全作品の背景にあるのだが。

ここで気付くのは、信仰句の多さに比して、代表句といわれるものの中にその作品が少ないということだ。敬虔であろうとすればするほど、いわゆる名句にはなり難いという宿命を持っているのかもしれない。

泥臭いと評されながら、己の弱さや傷、老や死、信仰の苦惱をこれほど赤裸々に詠み続けた俳人がいただろうか。常に自分を痛めつけていなければ落ち着かなかつた生涯である。本稿の副題を「内なる迫害」とした所以もある。

結末を言つてしまふなら、死のほんの数年前になつて、ようやく得心して「基督者われ」と詠んでいる。そこへの長い心の軌跡を信仰句を中心にして辿つてみたいと思

う。

因に、私はキリスト教徒ではないので、誤謬をおそれつつ俄か勉強で書いたことを付記します。

信仰の空白期

信仰の作品が無いという主旨の空白期であつて、信仰の沈潜期と言つた方が当を得ているかも知れない。昭和十五年から昭和三十年迄で、丁度第一句集『花文字』に相当する期間である。皮肉なことに、代表句といわれるものはこの期間に集中してい

る。

後年飛旅子は、〈信仰に熱意を欠いた時期があり、教会に通うこともなかつた。敬虔なクリスチヤンと言わると恥ずかしい〉と述懐している。

胸の湿布替へ るひまも聴く野分

(昭15)

「寒雷」創刊号の巻頭作品で、俳人飛旅子の晴れやかな出発であった。

全速航帽の顎紐梅雨したたる (昭16)

開戦の眼に沁むばかり冬菜の霜

(々)

海軍短期現役で中尉として、横須賀工廠造兵部勤務となる。

太平洋戦争中は、天皇制の国体にそぐわないキリスト教は適性宗教として軍部から圧迫された。「ヤソ」と言われ、「非国民」と言われて、石を投げられるほど大変なことであった。遠藤周作曰く、「戦中は二重生活者にならざるを得なかつた。まわりに胸をはつて信者であるとは言いづらかつた。しかし戦後すぐ解放されたかというとさにあらずだつた」。

梨剝くと皮垂れ届く妻の膝 (昭17)

この年予備役となり、電池製作所に復帰する。前年に信子と結婚をしている。

雲の峯藍ふかくなる夕かな (昭18)

歩みそめし子を陽炎の中におろす

(昭19)

とても戦中とは思えない平穏な句である。

(昭20)

戦後日本は平和国家発進に当つて、自由民主主義下の思想行動の自由が保証された。ここでキリスト教徒は大手を振れたかというとさにあらずだつたのである。

詩は眞実を書かなければならぬとい

う、終戦時の切実な感慨だらう。戦中、終戦時の飛旅子俳句は、あくまでもやさしく、抒情的、そして寡作である。

この頃の作品世界を、後年、鈴木六林氏に衝かれている。「田川飛旅子は、クリスチャン俳人として、人間探求派としてどのように戦争を通過し、この地獄の季節の終りを見届けたか。原爆がおとされ、日本が敗れた年に、句集に残した全作品が十一句とはまことにおだやかというほかはない。この批判は読者にまかせて……」と。

この鋭い指摘に対して、飛旅子は何の反論をしていないものと思う。人と争うこと

を好みない性格ではあつたが、反論できる事実も持つていなかつた。相手が戦争をライフワークとしている六林男氏であれば尚更である。酒の席の何かの話の折に、技術将校として、予備役として過した戦中にいささかの罪悪感を持っていると漏らしたことがある。

夜の雪に駅の時計の機械透け (昭21)

泉へ垂らし足裏を暗く映らしむ (昭23)

バッファローにて

蕗の葉むしくひ資本攻勢はじまるか

(昭25)

降誕祭雪靴脱げばうなだれぬ (昭26)

冬の鼠にうしろ通られ露語習ふ (ク)

(昭22)

コスマス見る尼僧の帽の白庇 (昭27)

電池製作所の労組委員となり、文化部を担当した。その折、古沢太穂氏をロシア語

鬚の神父啖き登る基地の坂 (昭29)

飛躍期であり、羽仁五郎などの進歩的学者

講師として招き、会社の食堂を教室にして勉強を始めている。飛旅子は、この頃から「現代俳句に社会性を」と主張して、混迷の戦後社会を意欲的に詠んでいる。

太穂氏はマルキストとして、野心的社会性俳句を作っていた。

ロシア映画みて来て冬の人參太し

太穂

白髪みごとしかし俺には神を説くな

（ク）

当時同じ寒雷人として最も親しく付き合つていた太穂氏に、「神を説くな」と声高に詠まればは信仰句など出来る筈もなかつた。

たたかれた。その折、古沢太穂氏をロシア語

教師として招き、会社の食堂を教室にして勉強を始めている。飛旅子は、この頃から「現代俳句に社会性を」と主張して、混迷の戦後社会を意欲的に詠んでいる。

太穂氏はマルキストとして、野心的社会性俳句を作っていた。

昭和二十四年の「風」のあるアンケートに飛旅子は、「戦争を批判する力を持たない」と答えた。

かつた当時の自分を恥ずかしく思う。青春時代は勉強ばかりで、マルキシズムのマの字も知らなかつた」と申し訳なさそうに答えていた。

だが、エリートであった飛旅子は、昭和二十六年には会社側に立つ役職につくことになり、労働組合を離れた。そして、技術提携先の米国グールド社へ四ヶ月の出張となる。

東風が曲ぐる働く人の帽の縁

キリスト教回心と告白

昭和三十一年三月二十四日の日録に、飛旅子は「或るキリスト教回心を経験す」と記している。

回心とはラテン語で変化の意。過去の罪の意志や生活を悔い改めて、神の正しい信仰へ心を向けることである。この体験は、通常は長い靈的変遷の到達としてあるが、唐突に訪れることがあるという。仏教でい

告していたユダヤ教徒のパウロは回心して、最も熱心なキリスト教の伝道者になつたという。

余談だが、アメリカのブッシュ大統領も四十歳の時、著名なテレビ伝道者ビリー・グラハム師の導きで回心をして、生まれ変わり、アルコール依存症を克服したといふ。

日本的に言うなら大厄でもあつた四十二歳の飛旅子は、何がきっかけで回心を体験したのか。

生と死の境に洩らす咳一つ 寒竹鳴つて父は言葉を搜しをり

(昭30)

昭和二十九年の大晦日に、六十六歳だった父上が脳溢血にて倒れる。以来失語症の残つた父を何十句にも詠んでいるが、心を痛めつづけていたことがよく分る。

またその暮には、横浜工場次長兼研究課長兼技術課長に任命され公私共に大変だつた。

田川博氏の蓄尿瓶へ寒く尿る (昭31)
冬の朝日看護婦は帽に髪押し込む

一月、今度は飛旅子自身が急性腎炎にて慶応病院に入院する羽目となつたのである。高血圧症もみつかり、三ヶ月の入院生活となる。

回心の体験は、入院生活を終えた直後のことであつた。それ迄祈ることもせず、信徒としての行いも怠けていたことを反省し

て〈キリストによる救いをひたすら願う〉と記す。ここから一気に信仰の作品が現われてくる。

麦の穂を壺に挿し読むマルコ伝

(昭31)

キリストは自らの死を地に落ちた麦にたとえたが、麦の穂はパンであり、キリストの体を象徴するものである。その青麦を活けて、福音書の「マルコ伝」を開いている。「マルコ伝」は新約聖書の中で最もキリストの生々しい人間の息吹を伝えてい

るという。

母の日や教会の木の椅子に傷 (昭31)
母の日は日本ではポピュラーになつていいが、そもそもはアメリカのメソジスト教

会から始まつたものである。

〈信仰の必要を痛感し、聖書を読む〉と書き記し、妹の竹谷信子のすすめによつて、日本キリスト教団東中野教会へ通うようになる。教会の行事にも積極的に参加をする。

祈るとき木の教会を梅雨つつむ

(昭31)

回心の祈りといふのは、キリスト教徒として自分が罪人であることを認識することでもあるといふ。

樹を白く塗装せり商クリスマス

(昭31)

信仰などどこ吹く風の日本人のバカ騒ぎを「商」の一字でチクリと刺している。まさに高度成長期に入らんとする頃である。

神の話を聞きし足にて氷滑る (昭32)

第二句集『外套』の小題に、「木の教会」「神の話」「ネロの鞭」「使徒行伝」などを付けて、はつきりとキリスト教徒であることを告白している。

神の存在と科学的理性

木の実降る遠くで甘く死が呼ぶ日

(昭32)

紅梅の幹に通ふは神の血か (〃)

鼻強くかむ見えざるものに執着し

(昭33)

「鼻強く」は自解に俟たなければならぬ。

い。(見えざるものとは、科学を超えたもの)

であり、「神は在し給うか」の問題でもある。

それへの執着で参つてしまふことが

ある)と、科学者としての葛藤を明かして

いる。「見えざるもの」は、終生のテーマとなる。

死の誘惑を感じながら、神と対話し、神

を受け入れようと毎日曜日教会に通う回心

の生活に入つたが、そこに大きな落し穴が待ち受けていた。

初蝶を見し眼つぶつて神見えず

(昭34)

〈昭和八年に受洗したが、信仰の道はけわしく、到底良き信徒とはいえない。初蝶は見えるが、神様は一向に見えてこない

で、時々その姿を見失う〉と嘆く。

後年、「陸」への投句者の選評の中で
も、しばしばこの問題に言及している。昭
和五十一年の一例は次の如くである。

夾竹桃羅馬に残るネロの鞭 (昭34)

歐米視察旅行の折のローマでの作。(夾

竹桃の血のような花と遺跡の中に、ネロの

使つた暴虐なムチがどこかに残されている

と確信した)と自解。皇帝ネロは、六四年

のローマの大火に乗じて、キリスト教徒を

スケープゴートに仕立てて迫害を開始した

のであった。

菊へまぢかに耳向けて読むパスカル伝

(昭33)

パスカルが飛旅子にとつて、終生の大切

な思想家であったことをこの度発見した。

十代でもう三木清著の『パスカルにおける

人間の研究』を読んでおり、七十八歳では

「パンセ通読しつ聖夜へ日の詰まる」を詠んでいる。『パンセ』は、パスカルの著

り、宇宙と時を支配する。曰く「神につ

いての一切の定義はほとんど不可能に近

い。神は無辺にして、無限なるものであ

り、巨大なもの。神が何であるかを証明す

ることは人知の及ばぬところである。曰く「イエス・キリストの啓示したものが神の言である。」

が、キリスト教に対して独自の宗教論を打ち立てた人物でもあるのだ。自らの信仰と理性との間の思想を確立した。「心の理性ではまるで理解できない独自の理性をもつている」と断言して、キリスト教のうちに理性を超えるものを保とうとした最初の人である。「信仰といふものは、心で神を感じるものであり、理性によってではない」というもの。

まさにこれは、科学者としての理性によつて神を見失いがちな飛旅子にとつて、心強いバイブルであつた。

神ありと決めし眼で読む冬の星

(昭37)

古代では星を神と思つて眺めていたが、聖書では、星は神の被造物であり、神の大ささを証明するものとなつてゐる。

飛旅子は、「神は在すのだ」と自分に言ひきかせて、聖書を読んでゐる。だがまだ疑問はとけず、迷いの中になつた。

安岡草太郎曰く。

受洗に当つて、遠藤周作に電話して「おれは神というものが分らないのだが、それでも信者になつてもいいのか

ね」と聞くと、「ある時、パツとページを開いたようにイエス・キリストに出会うというものではない」と言われた。

草田男も、クリスチヤンの夫人にひかれて教会に行つたが、神を受け入れる心、拒否する心の間に揺れて、受洗は死の前日であつた。

仮の世に負う諸々

実梅仰ぎて心で犯す罪かぞふ (昭31)

罪のごとく瘤負つて駱駝縁蔭に (昭33)

キリスト教徒にとつての罪とは、神と対立関係にあることだといふ。

法律を犯したり、社会道徳に違反したりすることとは区別される。神や隣人に対する愛を持たず、聖書から離れた生き方をすることである。聖書では、他のすべての罪の原因となる罪を「七つの大罪」として、高慢、色欲、貪欲、嫉妬、貪食、怒り、怠惰をあげている。

飛旅子は晩年まで、強い罪意識をもち、己を戒めるようになり返し詠んでゐる。

謙虛で穏和で質素な生き方を貫いていた師を日の当りにしていた俗人の私などには、どうしてそこ迄(?)を責めなければならぬのか合点がゆかなかつた。

受難週わが罪のまた山積す (平4)

時計草垣に咲かせて惰眠せる (平6)

八十歳近くなつての作。「受難」は「パッショニ」。時計草はパッションフラワーと呼ばれるが、同属のパッション・フルーツの雄蕊と雌蕊が十字架の形をしていて、キリストの受難をイメージさせるのだといふ。かつて飛旅子の家の垣根に植えられていた。

キリスト教には、核心となる難解な「原罪」がある。禁断のリンゴを食べて、最初の罪を犯したアダムとイヴの子孫として、人間は生まれながらに原罪を負うものと考えられている。「罪のごとく」が原罪を誣んでいると迄は言わないが、「糞尿車」に人間の業のようなものを感ずる。

分りやすく言うなら、死の恐怖におびえたり、不安に苦しんだり、人間的な限界に

ぶつかるその完全でないことが原罪なのだ
という。

短夜や愛といふ字を百度書く（昭41）

キリストといふ語を吃り祈る秋（々）

キリストは、「自分を愛するよう汝の
隣人を愛せよ」の言葉が好きだったとい
う。その「愛」の字を百度書いている。

「原罪を救つてくれるはイエス・キリス
トの愛なのである」というのが信仰の核心

らしいと、私にもいくらか分つてくる。
遠藤周作の『沈黙』三浦綾子の『氷点』
などは、不条理の罪、原罪を主題にしてい
る。

傷つきし柚子ほど強く匂ふなり

（昭27）

「傷」を語らずして、飛旅子の作品は語
れないと言つてもいいだらう。

傷心は母の遺伝か杜若（昭35）

自身を「母親に叱られると、すぐに「ご
めんなさい」と先に詫びてしまう気弱な子
だった。この性格を実は大いに嫌つてい
る」と分析しているが、気弱ということは

優しい心根の持ち主ということでもある。

実は、十二使徒の筆頭であるペテロも氣の

弱い人であったという。彼はネロに迫害さ
れて殉教している。

この傷つきやすい心が、陰に陽に飛旅子

作品をおおつていてる。

ピーマンの青き拳や核戦争（昭36）

飛旅子について師の漱邨は、ことある度

に「私の姿勢をただしてくれた人」「納得
しないと決して妥協しない芯の通つた一人
物」と語つていて。また作品については、
「自己に対しても、外に対しても、自分の

信じられないものは感動しきれない」という
誠実さがある」と評して、弟子を敬愛して
いた。

茶の花や医やすといふ語傷のため

（昭35）

この年の「寒雷」に、「心に傷のない人
は」を執筆。この厳しい世の中に生まれ

て、一日として心が傷つけられない日はな
い。俳句が生の爪跡である為には、心の傷
の嘆きがこもつていなければならない。時

なければ…』と。

ガラス負ひ寒波の天を映しゆく

（昭38）

外套も疲れ鉗穴暝らす

（昭39）

この時期電池にトラブルがあり、会社は
一時苦境に立たされ、飛旅子の心痛も大き
かった。高度成長期の責任ある企業人とし
て、苛烈な日々があり、傷つくことも多か
つたろうことは容易に想像できる。

犬交る街へ向けたり眼の模型

（昭38）

兜太氏に「現代都市の気味悪い面を曝し
てみせて」と激賞され、代表句となっ
てしている。いま一度この句の背景を考えてみ
るとき、盛んなる経済経済のかわいた社会
が透ける。

花野にて獸のごとく傷つく日

（昭41）

袋蜜柑と暗礁われも傷隠す

（昭42）

まどろめば痛みも眠るクリスマス

（昭45）

痛みあるゆゑにわれあり星月夜

（昭49）

枚挙にいとまがない程に、傷や痛みや挫

折を詠んでいる。パスカルの言葉「わたしの生は、本質的に惨めなものである」にいたく共感し、わが意を得たよう、自分はペシミストだと明かしている。この頃総合誌の「俳句時評」などに、日本が工業社会へ転換して、科学技術の発達による人間疎外の時代になったことを憂う文を書いている。

こわれた心に一本の燭クリスマス

(昭43)

聖書では、「ある目的のために屈辱や挫折があるだろうが、それはただの不条理とは考えず、イエスに従っているのだと思ひなさい」と説いている。

一花ごと自分を大切にと薙押す

(昭35)

「あとがき」に、「二十五年近く日々の哀歎をつづる句を作つてきて、俳句とは自分自身を大切にすることだという私なりの小さい開眼をした」と記す。

父死せり寒く大きな鼻を残し (昭40)

飛旅子五十一歳の時、父上が他界。文学を反対され、「爪をかむ癖を直すことだけしか父を超えられなかつた」と自嘲気味に述懐しつゝ敬愛していた父上であつた。その後の悲嘆追慕の数多の句をみると、飛旅子にとつてはキリストの死にも匹敵するものだったのかも知れない。

飛旅子五十一歳の時、父上が他界。文学を反対され、「爪をかむ癖を直すことだけしか父を超えられなかつた」と自嘲気味に述懐しつゝ敬愛していた父上であつた。その後の悲嘆追慕の数多の句をみると、飛旅子にとつてはキリストの死にも匹敵するものだったのかも知れない。

黄落期みんなが合つた時計持ち (昭42)

人間が同じ時間を所有することの不思議を思つて作ったというが、神の創造した時間の神秘性を詠んでいるのだ。

寒夜の尿感謝感謝と走り出づ (昭44)

董は飛旅子の最も愛した花で、句も多

い。

董は飛旅子の最も愛した花で、句も多

い。

古びたる聖書あり年改まる (昭47)

聖書のパウロの言葉に「わたしはキリストのためならば、弱さと侮辱、危機と迫害、行き詰りに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時こそ、わたしは強いからである」がある。

聖書のパウロの言葉に「わたしはキリストのためならば、弱さと侮辱、危機と迫害、行き詰りに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時こそ、わたしは強いからである」がある。

飛旅子はいつも「田川の大カバン」と呼ばれた黒い鞄を持ち歩いていた。その中には、耳栓などの七つ道具、何冊かの本と聖書が入っていた。周囲がハラハラするような晩年まで提げていたが、私は何かの責めを負わんとしている姿にみえて仕方がなかつた。

昭和三十九年発行の第一句集『外套』の

桐咲くやあつと云ふ間の晩年なり (昭41)

兜太氏の『愛句百句』にとられているが、ペシミストの飛旅子らしくまだ五十過ぎたばかりの作である。「青春が戦中戦後の混乱期にあつたから…」と自解してはいるが。

天皇も老斑持たず桜かな (昭48)

八月に、主宰誌「陸」を創刊。「天皇も

は創刊号に発表したものだが、自身も還暦を迎えて、昭和天皇の老斑に感慨ひとしおのものがあつたことだろう。

「陸」の誌名は、旧約聖書の創生記にあ

「神はそのかわいた地を陸と名づけ、水の集まつた所を海と名づけられた」から取られた。

与えられて有難うございますと神に感謝する。この一日が仮の世だと自分に言いきかず何物かが、私の中に古くからある)。

わが名に潜む十字架三つ落葉せわし

(昭48)

本名の博の字の中に十字架が三つあるといふ。この句意はどう読むべきか。イエスの教えは實にラジカルで、「自分の十字架を負え」というのだが、自分は受難の十字架を三つも負っているというのか。一方で、イエスの十字架は贖罪への感謝のしるとして、「愛の極致」とも言われているので、その愛が三つもわが名に潜んでいると言いたかったのか。

穀象もする死真似や笑ひけり

(昭22)

炎天を來て死に近き友を怖る
(昭32)
金魚壳の日焼奥眼に死の灰降る

(昭36)

割合早くから死や葬や墓を詠んできている。
死ぬ時は友も要らざり麻を着る
(昭45)

(昭46)

覚悟の中に冬の朝の死も入れる
(〃)
この年を境にして、それ迄の死の作品とは様相を異にしている。自分のこととして切迫した詠み方で、数も俄然多くなつてくる。

(昭47)

卓に這ふ浮塵子見て酌む厭世家
(昭47)

大綿や専務室はや他人の住
(昭49)
古河電池(株)の専務取締役を退き、非常勤の顧問となる。

(昭50)

春暁を覺めんとすなり仮の世に

自註(クリスチヤンである私は来世を信じているから、この地上を仮の世と思つてゐる。目覺めようとして、一日の生をまた

祝辞みな未来のことや植樹祭

昭和四十五年発行の第三句集『植樹祭』

タナトスとエロス

の「あとがき」では、〈楸邨先生からの「俳句は生きた証」を後生大事にして歩いたが、もう停年期である。未來の尊さは今にしていよいよ切実である)といふらかの焦燥感を述べている。

今死ぬも良しと言へるか寒に入る

(昭46)

夜光虫まだ見ぬ黄泉の端めくも

(昭47)

耳栓をして死すことあらむ濃霜降る
(昭48)

デパートの火事や墜ちゆく人撮らる
(〃)

死ぬ時は友も要らざり麻を着る
(昭45)

(昭46)

卓に這ふ浮塵子見て酌む厭世家
(昭47)

(昭48)

大綿や専務室はや他人の住
(昭49)
古河電池(株)の専務取締役を退き、非常勤の顧問となる。

(昭50)

春暁を覺めんとすなり仮の世に

(昭51)

自註(クリスチヤンである私は来世を信じているから、この地上を仮の世と思つてゐる。目覺めようとして、一日の生をまた

祝辞みな未来のことや植樹祭

昭和四十五年発行の第三句集『植樹祭』

ある。

鳥雲に命終のことおそろしき（昭49）

余りにも直接的表現であるが、これ程正直な詠み方もないだろう。死は人生にとって最大の恐れである。

釈迦もキリストもマホメットも、死への不安や恐れを克服するために、迷い思索し難業苦業をしたのであった。まぬがれ得ない死の問題に対して、勝利を与えてくれる

のが宗教であると信ずるからこそ、信仰者は敬虔をめざすのだと思う。飛旅子はすでに「夏羽織つけて信仰固くあり」と詠んでいたが、この局面にきて、突然強い死への恐怖に襲われたのである。

死ぬまでは生ひよどりが家かこむ

（昭49）

春宵を独りにされぬ死後のごとし

（昭50）

靴のみは無傷炎天下の轢死

（昭51）

まるで「死」の文字が座右にあつた如くに作句している。

聖書では、原罪を犯した結果、人類に死が入り込んだとして、「罪の支払う報酬は

死である」と説いている。

このタナトスにとりつかれたような時期、「黒」にも執着している。

言えば、黒い衣服を身にまとうならひどく

安心していられる。黒は死の不安を暗ましてくれる色であった筈だ。

夕焼は天の帝王切開か（昭51）

地上では旅人なりと冬の灯消す（昭47）

秋の田をくる黒翁のキリストは

（昭48）

黄金色の田の中の道を黒翁の人がやつてくる。遙かより自分に近づきつつあるの

は、復活のキリストに違いないと立ちつくしたのではないか。聖書では、死の問題の解決はキリストによつてもたらされる、と

している。

黒い布団といふものあらばそれに寝む

（昭49）

聖靈はきつと黒色クリスマス（ク）

黒き泡眼の中を飛ぶ実朝忌（昭50）

終末や風船に付く黒い糸（昭51）

「終末」には、復活からの「更新」という意味があるという。

飛旅子は、命終への震える魂を黒色によ

つて鎮めたかったと解釈すべきだろう。黒

は忌むべき色ではないと考へる私のことで

クリスチャンであつた母上が他界する。岸に黒く待てり流燈を突く係（ク）

人形を射つ流燈の町の辻（ク）

城佑三氏の案内で嵐山を訪れた折の作。

「岸に黒く」の句には、この世の終る地点から始まる冥界を詠みながら、ショーカ化された現代の仏事を諷刺している。これが飛旅子の眼だ。

「人形を射つ」は、「いま流燈をみてきたばかりの人々が、射的場で人形を射つて歓声を上げている。人間とは悲しい存在だ」と自解。

遍路ゆくひとりひとりの暗渠持ち

（昭51）

同じ信仰者として、いつの頃からか仏教

にも深い関心をよせている。

ねつりき
熱力学より茂吉が楽し桜の夜 (昭51)
東京理科大で非常勤講師として「熱力学」の講座を持つていたが、やはりどうしても文学の方が楽しいと詠んでしまう。

水澄むや退職の荷に聖書あり (昭52)
顧問としての席があつたが、それも解かれて名実共のリタイアとなつた。会社の机にも聖書は入れられていた。

第四句集『邯鄲』の「あとがき」に、「定年を迎える一生の間一筋に勤めた技術者としての仕事からも離れた。私の一生は何だったのかと顧みるとき、盧生の「邯鄲の夢枕」はまた私自身の嘆きでもある」と記す。

尿を出すことも骨折り花に老ゆ (昭53)
一見弱虫そうにみえる作品群だが、その弱さや老や死から逃げず、真正面から詠む飛旅子にこそ人間の強さがあるのだ、と気付く。

ことごとくデモン去りたる冬の肋 (昭52)

鳥交る此處千歳村柏谷なり
老人に観念の海曼珠沙華

(昭53)

暴れる蝶猫が岬へて陶酔す (昭54)
Tシャツの虹は二つの丘を越ゆ

451

キリスト教では、デーモンとはサタン (魔王) に率いられる悪靈のこと。惡の根源であるデーモンは、人間の体にとりついたりもするという。

「灼石の一つ憤怒の目鼻みゆ」「市中にはらわたを煮る露の日々」とも詠んだ苛烈な企業人の勤めが終つて、肋に巣喰つていた諸々のデーモンが退却したというのである。

楸邨には、戦争責任を追及された頃の作品に「サタン生る汗の片目をつむるとき」がある。余計なことだが、久女にも俳句継続と離婚問題に悩んでいた頃の句に、「われにつきるしサタン離れぬ曼珠沙華」がある。

このタナトスにこだわった数年のあいだに老と死の作品は百三十、黒は三十句程度ある。

ルカによる福音書
神のおとずれの時を知らずに鳥威す
(昭52)

隙間風般若波羅蜜多生きたしや

(一々)
「生きたし」とエロスへ振り戻すのではないだろうか。鬱然として、飛旅子にエロスの作品が生まれる。

憑物がおちたような「生きたしや」「千歳村」の句である。そして「觀念の海」の果てに平安の訪れを予感させる。

(昭53)

人形をみな裸にす暖炉の前 (昭55)

おんわれめありと思へぬ女難かな

は、人の評価はともかく、わずかに私の内
に籠つて荒ぶる魂を鎮める役割を果してく
れた)

遁世したき夫と住みて栗を剥く (昭56)

「おんわれめ」は六十五歳の作。兜太氏
が、「このエロスの句は田川さんの句とし
て秀逸だ。こういう句を作るようになつた
のは、楸邨先生の影響であり、田川さん
の成熟だ」と語つている。いみじくも楸邨六
十五歳の時、「のんのんと馬が魔羅振る霧
の中」を詠んでいる。

十五歳の時、「のんのんと馬が魔羅振る霧
の中」を詠んでいる。

激写時代この大汗は胸か尻か (昭55)

塾始め母音と読めば子等笑ふ (〃)

鬼灯や方寸になほエロスあり (昭56)

これ以降、深刻な死の句は消失する。
山法師咲けば濃くなる旅の鬚

昭和五十五年刊の第五句集『山法師』の

「あとがき」で、この頃の心境を述べてい
る。
〈この句集名は、昔出家遁世し奥深い山
にこもつて世俗に反抗した僧侶のイメージ
に憧れたからである。他の何人のためでも
なく、自分のみのために作つてきた俳句

は、孤独ほど友としてふさわしい相手はない
ない) と言い、〈遁世というあこがれの境
位を体得してからあの世にゆきたい〉と述
べている。

科学と訣別して

物を焚き熱を逃がして飾壳る (昭58)

一般的には写生の対象となりにくい熱と
いう物理的物体に目を向けて、科学者の面
目躍如とというところだ。〈見えぬもので、
人間にとって大事なものが、段々身辺に多
くなつてくる〉と、この頃しきりに述べて
もいる。

山法師咲けば濃くなる旅の鬚

見えぬもの尋と刺す秋晴は (昭58)

キリストを着よと手編のジャケツ賜ぶ (〃)

「キリストを着る」とは、アガペー(イエ
スの無償の愛)に沿するということだろ

う。

非常口に緑の男いつも逃げ (昭58)

有季か無季かで物議をかもした作品だ
が、飛旅子晩年の代表作となる。最近私
は、この「緑の男」に飛旅子一流の自嘲を
秘めているのかも知れないと思うようにな
った。

雁来紅の見事な色彩を見せてくれるの

は、造物主の神様以外にある筈がない、自
分もその造物主の御手に守られていると信
じて、一句をなしたという。

袖ありやあり雁来紅の立つかぎり (昭58)

山靴に赤紐交差涅槃西風 (昭60)

『正法眼藏』読めど進まず麦は穂に

クリスチヤンが何故と思うが、遠藤周作なども仏教書を沢山読んだという。ヨーロッパの宗教を受け入れてゆくには、やはり困難も多く、仏教やアニミズムなども知りたいという欲求が強まるようだ。

飛旅子は、信仰の機微に触れたいと、青年時代から道元の書を座右に置いていた。だが難しさに敗退しつつ、最晩年まで挑戦した。

百合を粧ひしものが星座を司どる
この年の「陸」に、「見えるものから見えぬものへ」と題して、科学への訣別文とも言えるものを書いている。
私は科学を学びながら、絵画や短歌俳句の芸術の分野に興味が拡がってゆくにつれて、段々と科学が規定しうる分野には一つの限界があることに気がつきだした。科学の力を評価はするが、自分の老病死がさせまっている現在、科学万能主義にはついてゆけない。そこから先にあるのが、宗教とか信仰というものだろう。科学から宗教への段階には大きな落

(一)

差がある。どこか高處から思い切つて飛び下りるような論理を超えた飛躍をしないと、この段差を克服できない。

威し銃修道院の裏田にも

(平2)

顕微鏡で覗く聖書に生えし黴
科学と宗教の問題は、古くて新しい問題といえる。かつてキリスト教は科学に対しても不寛容であつた。ガリレオ・ガリレイの宗教裁判でも分るよう、弾圧した歴史がある。現代では勿論弾圧はないが、信仰

者の胸中には科学との越えられない深い溝があるのだろう。夏目漱石は、「人間の不安は科学の発展から来る」と『行人』の中で語らせてている。科学がどんなに発達してもカオスの領域は残されるということだ。若い優秀な科学者がオウムに入信したことでも、この問題と大いに関係する。

盲導犬大使徒の眼持てりクリスマス
飛旅子は、盲導犬に出会った時、ふと使徒（キリストの福音を伝えるための弟子）が街を歩いているのだと自覚したという。最後の第七句集『使徒の眼』の「あとが

き」に、「俳句が私をどんなに力づけ生き

甲斐を与えてくれたか分からぬ。五十数年にわたつて御指導いただいた恩師加藤楸邨先生に心からの感謝を捧げたい」と記しているが、その出版の月に楸邨が他界する。

平成五年七月の楸邨の死は、飛旅子にとってどれほどの痛恨事であつたか。いつの頃からか、「楸邨先生は神様」と漏らす程に畏敬する師であった。

達谷山房の大菩提樹に再会す

(平6)

達谷山房は楸邨居だが、この菩提樹は恐らく楸邨の気に入りの樹であったのだろう。田川夫人が訪ねた折、「是非信子さんに見せたい樹があるから」とわざわざ庭に案内されたという話を聞いている。ここに飛旅子にとつては若い頃から何度も眺めてきた菩提樹である。私の知る限りでだが、これが唯一の追悼句だ。

喜雨到る基督者われ喜びて
飛旅子俳句の中でも、これほど手放しで喜ぶ作品は他に知らない。長い信仰生活の果

ての八十歳になつて、漸く「基督者われ」

と高らかに詠んでいる。生を欺かずにつきた
信仰と句業の豊かな収穫である。

「創生記」机上にひらく初明り（平7）

「福音歳時記」董の鉢と身辺に（平8）

悪霊のつきし萌しや短夜の生（〃）

好きなものを身辺に置いて過す平穏な

日々だが、時にふと、かつて悩まされた悪

霊（デーモン）に憑かれそうな気がする夜

もあつた。〈老いて弱者となり、金力欲、

名譽欲がなくなると、見えなかつたものが

見えてきて、魂は自由になる〉は、最晩年

の言葉である。

街路樹遙かに十字架立てり今の幸

（平9）

この年には氣力の衰えがすすみ、作句數

も著しく少なくなつてくる。

大きな息胸に入れけり初日浴び

新年の窓枠の影背に負ひたる（〃）

二月に、第十回現代俳句協会大賞を受

く。

竹売りの声句会の人を笑はせ過ぐ

虹を生む蛇口の廻り人集め（平10）

平成十年は、以上の四句のみである。残

念ながら、それ以降の作句はない。

創作の力は無くなりつつあつたが、句帳の最後のページには、赤ペンで「作句修練」としつかり記されている。

平成十年七月に「陸」二十五周年を祝い、九月には、唯一の句碑が山形県尾花沢市に立てられた。

おわりに

はまさに、きびしく内省しつづけた飛旅子にこそふさわしい歌詞である。

私はずっと、師飛旅子の苦渋の作品群は、一種のスタイルであり、文学的耽美主義ではないかと思っていた。しかし、今、それは神と己との距離を計る一つの物差しとして日々詠まれていたのだ、と確信している。晩年は、他者の眼に叶う作句には関心がなかつたのである。

基督者田川飛旅子は、七つの大罪すべてを踏まえて、それを超克するために信仰を深め、その証しを率直に作品化し、自己救済を果して旅立つたのである。

平成十一年三月八日、心筋梗塞と脳梗塞によつて倒れ、緊急入院をする。意識は戻ることなく、四月二十五日肺炎を併発して他界。享年八十五であつた。

告別式は四月二十八日、日本キリスト教団東中野教会で行われた。飛旅子は自分の告別の讃美歌は、「よろずをしらす愛の御手に」にしてほしいと書き遺していた。「センチメンタルに歌わないで」とも付け加えられていたという。

この讃美歌の四番の最後のフレーズは、「悩みし子らは幸なるかな」である。それ